

【研究ノート】

シャーキャチョクデン著『了義を一つに 成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅱ)

原田 覺

本稿は下記拙稿に接続するものであり、以下に現代語訳する資料などについて、特に科文の全体的構成については下記拙稿を参照頂きたい。

「シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考」『国士館哲学』10号、国士館大学哲学会、東京、2006(平成18)年¹

【第6段落】他の者達はいふ| 「それによってその様に教示(1/2)すべきことでないのだ| 」と云うけれども| その様に説示することは貴方が| 尊者[たる]アティ[一]シャ A ti śa[hi]の教言を正量として承認することにより| 如何[であれ]話として| 「現前[量]とマア比[量]rjes su dpag| |仏教徒がこれ[等]二を把握し了り| |二者によって空性が通達されるのであると| |(2/3)此岸 tshul/tshu rolが見える愚痴(無明)を述べる| 」と[説示し了り]そして| 「有分別 rtog bcas[と]無分別 rtog pa med paの| |二知によって通達されないと| |阿闍梨[で]学者[たる]清弁 Bha ba/bya は仰せになる| 」と[説示し了り]そして| 「見えないことそのものそれが見えることと| |本当に甚深の経から仰せになった| 」と(3/4)説示し了ったそれについて如何[であれ]話が述べられるべきである|

敵者である「アティ[一]シャの教言を正量として承認する」「他の者達」即ちツォンカパと彼に従うゲルク派の学僧達は、著者の理解に反対する。それに対して著者は、敵者達自身の見解と矛盾する「アティ[一]シャ」の三種の発言について、矛盾しないと言う合理的な説明をする必要がある、と批判する。「アティ[一]シャ」の三種の発言とは、第一に「現前[量]と」

「比[量]」「によって空性が通達されないとする点、第二に「有分別[と]無分別」「によって通達されないと」する点、第三に「見えないことそのもの」「が見えること」であるとする点であり、これ等の見解は第4、5段落などに述べてきた著者の見解に寧ろ一致することを暗に示している。

【第7段落】第二[たる]讃頌聚の[考え]方に於いて| 勝義の諦と| 心の金剛 *sems kyi rdo rje* と| 法の界の[体性]智[と]等を承認し了ってから| それそのものを不浄[なる]衆生の場合に於いて[は]垢の浄治[すべき]基礎(如来藏) *sbyaṅ gshi* そして| 道[たる](4/5)聖者の分位に於いて[は]浄治すべく為す智 *sbyoṅ byed ye śes* の近取の[原]因 *ñe bar len paḥi rgyu* そして| 清浄[たる]涅槃の場合に於いて[は]転依 *gnas gyur* の智と言われるものそのものとして承認して| [何故ならば]『法の界に対する讃頌』 *Chos kyi dbyiṅs su bstod pa*(北京版 No. 2010)から| 「誰であれ全て知らないならば| |三有 *srid pa gsum* に全く輪廻(5/6)する者[たる]| |全ての衆生に確か[に]住する| |法の界に敬礼[し]恭敬し| |誰であれ輪廻の[原]因と成ったもの| |それそのものを浄治すべく為されたことから| |法の身[体]はまたそれそのもの/[真]実性 *de ṅid [do]* なのである| |」と[説示し]そして| 「[住]処は完全に変化(転依)したもの *gnas ni yoṅs su gyur pa* であって| |法の身[体]と詮説したもの(6/7)であるのだ| |」と[説示し]そして| 「ここに於いては涅槃そのもの[たる]| |無垢に成ったことなのである| |全ての衆生の無実有(無為法) *dños med pa[hi]* の| |その実体はまたその行境[で]| |それが見える菩提[の]心[の]王 *sems dbaṅ po[たる]*| |本当に無垢[なる]法身に| |(5b7/6a1)智[の]海が転依し了ってから| |各種[の]宝石が如何であれ[そうである]通りに| |それから/彼は[事]業を *de las* 衆生[の]為[に]最高にお為しになる| |」と[説示し]そして『心の金剛に対する讃頌』 *Sems kyi rdo rje la bstod pa*(北京版 No. 2013)から| 「善妙[なる]心から仏が生起する| |自己[の]心それに対して敬礼するのである| |」(1/2)と[説示した]等に於いて有法[たる]世俗分 *kun rdzob pa* の諸法を別に棄捨し了ってから| 法性[で]勝義の智のみ[たる]輪廻[と]解脱の一切の法の基礎と| [住]処が完全に変化(転依)した *gnas yoṅs su gyur pa[hi]* 時[に]仏の智そのものと成ることと| それはまた個別的自己による(2/3)証悟の智の経験対象そのもの[であることと]に付いて説

示したうえ| それそのものは言説として勝義の諦[で]正規のもの/[の]性相のもの mtshan ñid pa[r]であると承認する必要があることであるのであって| [何故ならば]最高の聖者[の]方々の瑜伽[に於ける]現前[識] rnal hbyor mñon sum の経験対象であるのであるが故にそして| 法の界と[十八]界 khams は善逝の蔵(如来蔵) bde bar gśegs(3/4) paḥi sñin po と| 心の金剛そのものであると説示する必要があるが故にである| 中観帰謬派の典籍に於いてはその様に説示する品(過程) skabs が有るのでないのであって| [何故ならば]そこに於いては有法と法界| 智と識| 仏と衆生など[の](4/5)[相互]依存[して]成立[したもの] rtos grub として成立するその一切は| 言説として有る[と]等[しく]そして| 勝義として無い[と]等しく説示するけれど| 捨[てることと]取[ること](取捨) h̄dor len の品は無いが故にそして| [相互]依存[して]成立[したもの]であるのでない法は言説として承認しないが故にそして| 仏の地によって(5/6)集められた智が有るとは説示しないが故にそして| 個別的自己による証悟の智[で]行境と具なるものは清弁 Legs Idan h̄byed と| 月[称の]両者が努力してから否定したが故になのである|

第3段落の「讃頌聚」の「説示の[考え]方」をここでは「第二[たる]讃頌聚の[考え]方」として採り上げる。即ち「讃頌聚」では「勝義の諦」と「心の金剛」と「法界体性智」[と]等を承認し、「それ」等を「不浄[なる]衆生の場合に」は如来蔵とし「聖者の分位」で「[は]浄治すべく為す智の近取の[原]因」とし「涅槃の場合に」「[は]転依の智」「として承認」とし、教証として『法界讃』から三種類の教証と『心金剛讃』から一種類の教証を示した上で「世俗分の諸法を」「棄捨」したならば「法性」は「勝義の智」であり「輪廻[と]解脱の一切の法の基礎と」「[住]処」であるので、転依し「た時[に]仏の智そのものと成る」とする。そしてその「仏の智」は個別自証智「の経験対象そのもの[である]」とし、更に「言説として勝義の諦」「であると承認する」べきであるとする。その論拠として著者は、第一に「仏の智」は「聖者[の]」「瑜伽[に於ける]現前[識]の経験対象であり」、第二に「法の界と[十八]界は」如来蔵「と」「心の金剛そのものである」「が故にである」とする。また「中観帰謬派の典籍」では以上の「様に説示」していないとし、その論拠として著者は、「中観帰謬派の典籍」では第一に「有法と法界」や

「智と識」や「仏と衆生など[の相互]依存[して]成立[したもの]」「の一切は」「言説として有」「勝義として無い[と]」「説示するけれど」も取捨をしておらず、第二に「[相互]依存[して]成立[したもの]で」「ない法は言説として承認」せず、第三に「仏の地によって集められた智が有るとは説示」せず、第四に「清弁と」「月[称の]両者が」個別自証智「[で]行境と具なるもの」を「否定したが故に」「である」とする。

【第8段落】然らば正理聚と讃頌聚に於いて随順しない(6/7)差別がその様に「生起するのは何故かと[いう]ならば」正理聚に於いては聞[学と]思[量]の増益を断じる為に為されたうえ、讃頌の聚に於いては修習によって実践すべき為に為されたことなのである。――

ここで著者は敵者の反問を想定し「正理聚と讃頌聚」の間に何故「差別が」「生起するの」かとし、その問いに対して「正理聚」は聞思「の増益を断じる」ことを目的とし「讃頌聚」は「修習によって実践すべき」ことを目的としていると答えている。

【第9段落】然らば典籍[の考え]方[の]二者は矛盾を有するものと成って(6a7/b1)「何故ならば」正理聚に於いて決定したそれを讃頌聚に於いて修習によって実践すべきことと説示しない[で]――そこに於いて実践されるべく説示されたそれを正理聚に於いて勝義の諦であると説示することは一体何をか言わんやであり――唯有 yod pa tsam をも否定したが故にであると[いう]ならば――過失は無く(1/2)「何故ならば」正理聚に於いて聞[学と]思[量]の知が増益を断じたそれは――体験対象に対して[性]相[を]執着 mtshan hdzin する分別を否定する為であるのであるうえ――その様に否定し了ってから法の界を体験対象として説示したことに過失は何も有るのでないが故にである――それ[たる]話(2/3)としてまた――「諸分別は事物が有るならば変化するものであって――事物は如何様に[も]無いと完全[に]伺察し終わった――」と[いう]のである。――

前段落の著者の回答に対して、更に敵者の反問を予想して「正理聚」で「決定した」ことを「讃頌聚」で「修習によって実践す」ることなしに「讃頌

聚」で「実践すべきこと」を「正理聚」で「勝義の諦と」するのは誤りであり、また著者は「唯有をも否定した」ので「正理聚」と「讃頌聚」の二者は矛盾」として設問する。これに対して著者は「過失は無」とし、その論拠として「正理聚」で「増益を断じ」るのは「体験対象に対して[性]相[を]執着する分別を否定」することであり「否定し」た上で法界「を体験対象と」するのである「が故にである」とし、続けて典拠を明示しない教証を提示する。ここでの敵者は著者が「唯有をも否定した」としているのも、明らかにツォンカパ及びゲルク派の学僧達となるであろう。

【第10段落】然らば見解が或る他のものを決定し了ってから修習が或る他のものを体験し了ることと成るのでないのであるかと[いう]ならば[そう]でないのであって| [何故ならば]見解が戲論(3/4)の総ての資糧を否定し了ってから修習した時に| 習熟する[ように]為る知覚による法の界の[体性]智そのもの以外[に]体験対象として合理的なものは何も有るのでないのであるが故にである| それはまた所取[と]能取[の]二は世間人の世俗[で]| それを否定した(4/5)「無[いものとして]否定すべきこと」は分別が施設した世俗として確定されることにより智の行境たり得ず| 無二の智の名を有するそれはどれだけであれその言説を承認するそれだけに| 自己の実体に対する自己[による]証悟 ran rig を現前[識]に於いて承認する必要があるのであって|(5/6) [何故ならば]如何[であれ]話として| 「作明(目)gsal byed が最も明らかである時に| | 自己の実体が最も明らかである[ことに]同意する| |」と[いう]のである| |その様であるならば聖者が正理聚を前にお造りになり且つ| その後に讃頌の聚をお造りになったと成立したことであるのであって| [何故ならば]見解に於ける増益を断じる[ように]為る正理(6/7)が先行し了ってから| それが決定した意義を実践するのが正理(道理)であるが故にそして| 正理聚は中間の教誨の直接[の]教示(直説)[で]言葉が如何であれ[そうである]通りのことそのものとして正理によって決定する[ように]為るものであるのであるうえ| 讃頌聚は最後の教誨[たる法]輪(6b7/7a1)から生起する了義それそのもの[で]法のお身体を成就する基礎であると説示され了ってから| 瑜伽師が実践し了るべき対境であると説示するが故にである|

更に敵者の反問を予想して、聞思の「見解が」「決定し」「てから」それを「修習」して「体験」するのかと設問し、それに対して著者は「[そう]でない」と否定し、その論拠として、聞思の「見解が戯論」「を否定し」「てから修習した時に」は「習熟する[ように]為る知覚による」法界体性智だけが「体験対象」であるが故にであるとする。著者は更に議論を展開して「所取[と]能取」「は世間人の世俗[で]」あり、その「世間人の世俗」「を否定した」「無[いものとして]否定すべきこと」は分別が施設した世俗であって「智の行境」ではなく、一方「無二の智」は「言説を承認する」のと同程度に「自己の実体に対する」自証「を現前[識]に於いて承認」しなければならないとし、その論拠として、ここでも典拠を明示しない教証を提示する。以上の議論を前提として「聖者が正理聚を前に」「後に讃頌の聚を」著述したと結論付け、その論拠として、第一に聞思の「見解に於ける増益を断じ」る「正理が先行し」その「正理が」「決定した意義を実践する」べきであるとし、第二に「正理聚は」第二法輪「の」直説「[で]言葉」の「通りのこと」「として正理によって決定する」のであり、一方「讃頌聚は」第三法輪の「了義」で法身「を成就する基礎である」ので「瑜伽師が実践」す「るべき対境である」「が故にである」とする。

【第 11 段落】他の方達が言う讃頌聚は前にお造りになったものであるのであって | [何故ならば]『六十[頌如]理[論頌]』 *Rigs pa drug cu pa[r]* (北京版 Nos. 5225、5265)に | (1/2) 「過失[の]一切が生起する住处[たる] | 無そのものを完全に回避し終わるけれど | 何の正理によってであれ有そのものをまた | 回避するように成ることを聞くように為せ | 」と説示したことによるのである | 仰せになるそれは合理でないのであって | [何故ならば]讃頌聚が法(2/3)界は有ると成就し了ってから | 正理聚がそれは無いと説示するならば矛盾に於いて迷乱することと | 法界を聖者の知[と]見 *śes mthoñ* が作ったことと | 空性が事物の崩壊する原因 *hjig rgyu[r]* に[帰]謬すること[と]等の過失が入ること[と]によって(3/4)なのである | それによるならばその教言の意義は | 言説として無いことは福德でないのであることは最初に回避する場合に分析し終わっているうえ | 勝義として有ることは正理の聚に於いて分析するように成ると言う意義であって | [何故ならば]如何[であれ]話として | 「福德でないのである[こと]は(4/5)最初に回避する | |

中間で我をマア回避することそして | |と出現する如くなのである |

再び敵者である「他の方達」の反問を想定して「讃頌聚は」「正理聚」の「前に」著述したものであるとし、その論拠として『六十頌如理論頌』第2偈を提示する。これに対して著者は「それは合理でない」と否定し、その論拠として「過失が」生じることを指摘し、第一に「讃頌聚が法界は有ると成就し」たのに「正理聚が」「法界は」「無いと説示するならば矛盾」が生じ、第二に「法界を聖者の知[と]見が作った」ことになってしまい、第三に「空性が事物の崩壊する原因に[帰]謬」してしまうとする。更に著者は『六十頌如理論頌』第2偈「の意義は」「言説として無いことは福德でない」ことであることを「最初に回避する場合に分析し」「勝義として有ることは正理の聚に於いて分析する」と言うことであるとし、その論拠として、ここでも典拠を明示しない教証を提示する。以上でこの仮想問答を終了する。

【第12段落】その様に説示したことによって成立した意義は | 中観を述べる両者の典籍から出現する見解が増益を断じる[やり]方に於いては | 基礎[たる]有法は詳細[と]簡略の差別が本当(5/6)に大であるのであって | [何故ならば]実体性は無い[と述べる中観]派は | 遍計[所執性]と依他[起性]と円成[実性]の三者は実体性により空であると決定したってから | その代わりに空性と言われる法をも承認しなくて | [何故ならば]それはまた自己の実体によって空であると説示するが(6/7)故になのである | | 瑜伽行派によつては | 遍計[所執性]は自己の実体によって空[で]そして | 依他[起性]は他者の実体によって空[で]そして | その代わりに自己の実体によって空でないと残されたものは | 依他[起性]の実体あるいは円成[実性]と言われるそれそのものなのである | | (7a7/b1)と説示するかそれとも空[の]基礎(事物)stoñ gshi[hi]の有法は依他[起性]で | それが何によってであれ空である[その]否定すべく為すべきもの(所破)dgag byaは遍計[所執性]で | その有法がその否定すべく為すべきものによって空である[その]事物は円成[実性]である | と説示するのである | |

前段落までの仮想問答を受けて「成立した意義」を以下で確認する。最

初は「実体性はない[と述べる中観]派」と「瑜伽行派」の「両者の」「増益を断じる[やり]方」は「基礎[たる]有法」「の差別が本当に大」きいとして、以下に比較する。まず前者は「遍計[所執性]と依他[起性]と円成[実性]」の三性が共に「実体性により空である」とし「空性と」言う「法を」「承認しな」いとし、その論拠として、三性は「自己の実体によって空であると」「するが故に」であるとする。一方、後者は「遍計[所執性]は自己の実体によって空[で]」あり「依他[起性]は他者の実体によって空[で]」あり「自己の実体によって空でないと残」ったのが「依他[起性]の実体」即ち「円成[実性]」であるとし、或は事物「の有法は依他[起性]で」あり「有法」「が何によってであれ空である[その]」所破「は遍計[所執性]で」あり「有法がその」所破「によって空である[その]事物は円成[実性]である」とすると述べる。「瑜伽行派」たる後者の理解が著者の他空説の内容であることになる。またく122>の「自空であると述べるもの」とは、或はこの「遍計[所執性]は自己の実体によって空[で]」あることを指すのであろうか。

【第 13 段落】その中観派[の]両者はまた聖者の等引 mñam(1/2) gshag/bshag によって修習すべく為すべきこと(修習対象)或は体験すべく為すべきこと(体験対象)を承認する時に識別[するやり]方は一致しているのであって| [何故ならば]両者がまた法の界の[体性]智について説示することによってなのである| |

第 11、12 段落の「中観派[の]両者は」「等引によ」る修習対象すなわち体験対象「を承認する」為の「識別[するやり]方は一致している」とし、その論拠として「両者が」法界体性智を「説示する」が故にであるとする。

【第 14 段落】その等引から起きた後[に]得るものとして言説を施設する[やり]方は(2/3)一致しないのであるなのであって| [何故ならば]瑜伽行派によっては変化することの無い円成[実性]と言われる有名[な]| 法界[の体性]智あるいは二として無い(無二)智それそのもの[たる]勝義の諦そのもの dños と| 勝れた我 bdag dam pa と| 常住堅固寂靜不易 rtag brtan shi ba gyuñ druñ(3/4)と| 諦として成立したもののそのもの bden par grub pa ñid として言説を施設する様にするうえ| 反面では| 見解が究極した後[に]得るものとして否定すべく為すべきもの(所

破)[たる]諦[として]成立[したもの]bden grub は無いが故に諦[として]無[いもの]bden med も kyañ 有るのでないのだ | |と説示することによってである |

中観派の両者は后得「として言説を施設する[やり]方」は一致しない」とし、その論拠として「瑜伽行派」「は変化することの無い円成[実性]」即ち法界体性智と、無二「智」「[たる]勝義の諦そのもの」と「勝れた我」と「常住堅固寂靜不易」と「諦として成立したものそのもの」とを同義として「言説を施設」する「反面で」「見解が究極した」后得「として」所破「[たる]諦[として]成立[したもの]は無い」ので「諦[として]無[いもの]も」無いが故に「である」とする。

【第 15 段落】中観派[の]両者はまた等引(4/5)に於いて見る[やり]方は一致しているのであるのであつて | [何故ならば]瑜伽行の[考え]方に於いてまた | 見解の面に於いてはそれによって何ものに対してであれ所縁となるその法界は有[る]無[い]と諦[である]虚偽[である]等を何としても認定せず且つ | 認定しない如くにそれとそれ(これこれ)として成立しなかったが故になのである | |

「中観派[の]両者は」「等引に於いて見る[やり]方」は一致している」とし、その論拠として「瑜伽行の[考え]方」は「見解の面」で「何ものに対してであれ所縁となる」「法界」が「有[る]無[い]」或は「諦[である]虚偽[である]等を」「認定せず」その為に「法界」はこれこれ「として成立しな」いとする「が故に」「である」とする。

【第 16 段落】然(5/6)らば見解と言説[の]二から何を強力と為るかと言うならば | 実体性は無い[と述べる中観]派は | 究極の見解の等[引と]後[に]得るもの[mñam rjes[と]の]建立する[やり]方は一致しているうえ | 反面[で]は等引と後[に]得るもの[と]の言説は一致しないと述べるけれど | 等引は強力 dbañ(6/7) brtsan/btsan pa であるのであつて | [何故ならば]それが証悟されない(無明 ma rig pa[hi])の感情 slad pa/la と離れた智であるのであることによって対境の住する[やり]方(状況) gnas tshul と一致させるうえ | 後[に]得るもの[の]言説は語[や]分別

[の]何でも良い[けれどそれ]から出なかったことによって住する[考え]方(実質)gnas lugs の対象を対境と為す様に出来ないが故にである|

著者は設問を立てて「見解と言説」とを比較して「何を強力と為る」のかと問い、回答として「実体性はない[と述べる中観]派」は「究極の見解の等[引と]」后得「[と]」の建立する[やり]方は「瑜伽行派と「一致している」一方で「等引と」后得「[と]」の言説は「瑜伽行派と「一致しない」とするけれども、瑜伽行派である著者の考えでは「等引」の方が「強力である」とし、その論拠として「等引」の言説は無明の「感情と離れた智である」「ことによって対境の住する[やり]方と一致させる」ことが出来るのに対して、后得「の言説は語[や]分別」の範囲を「出」ることが出来ないので「住する[考え]方の対象を対境と為」そうとしても為し得「ないが故にである」とする。

【第 17 段落】要略するならば中観[の] (7b7/8a1) 両者の[考え]方に於いてまた| 述[べるべく]思[うべく]詮説[すべきものが]無[いこと] (空性) smra bsam brjod med による差別は各自の典籍に明らかであり且つ| その如く明らかであるその故に勝義の諦であるのだ[と]熟知する者は聖者方の自己[による]証悟の智 (1/2) によって経験するけれど| 詮説する[ように]為る (能詮の) 語と分別によってはこれであると識別し了り得なくて| [何故ならば]如何[であれ]話として| 「思うべき[として]」無く詮説すべきとして無い[が]故にであって| |[何故ならば]詮説すべき[として]無い[のは]勝義であるのである[が]故になのである| |」と[説示し了り]そして| 「両舌である[が]故に聞くべき対境でなくて| |勝義 (2/3) であるのである[が]故に思うべき[対境]でない| |法性は甚深である[が]故に世間人の| |修習など[の]対境でないのである| |」と説示し了ってから| そのお陰で世間から出離した (出世間の) 智の対境そのものであると説示し了ったことによってなのである| |

著者は以上の議論を「要略」して「中観[の]両者の[考え]方」は空性について「明らか」に「差別」があり「その故に勝義の諦を」「熟知する者は聖者方の」自証「智によって経験するけれど」能詮の「語と分別によってはこれであると識別し」「得ない」とし、その論拠として、拠を明示せずに二種の教証を提示した上で「勝義の諦」は出世間の「智の対境」であるが故にで

あるとする。

【第 18 段落】その如くであるならばまた言説に(3/4)依存し了らないで通達されることは出来ないので| 言説の時にその諦の[性]相[の]基[礎](事相)が教[証と正]理と矛盾しないもの[である]事を識別するならば所取[と]能取が二として無い(無二の)その智そのものに就いて識別する必要があるのであって| [何故ならば]中観[の]帰謬[派と]自[立派]の典籍に於いては| (4/5) 勝義諦が適合するその[性]相[の]基[礎]を識別し了ることは無く且つ| 弥勒[の]法が、追隨するものと共にマア| それであるのだ[と]熟知する[性]相[の]基[礎たる]その智そのものについて明らかに説示した教証から las [説示し?]そして| 正理はまた| 正量が称量すべき(5/6)ものは勝義の諦であり得ないうえ| 正量に於いても| 比量によって称量すべきものは共相であると説示するが故に勝義の諦であり得ず且つ| 現前[量]の所称量は自相によって遍充されるが故に前[の教証]のみなのである| |

前段落の議論を受けて「言説に」よらずに「通達」す「ることは出来ないので」「言説の時に」「諦の」事相「が教[証と正]理と矛盾しない」「事を識別する」には「所取[と]能取が」無二である「智」に「就いて識別する必要がある」とし、その理由として「中観[の]帰謬[派と]自[立派]」は「勝義諦が適合する」事相「を識別」す「ることは無」いけれど、一方で「弥勒[の]法」等には「それであるのだ[と]熟知する」事相「の智」を「説示した教証」があると共に(?)「正理」として「正量が称量すべき」「は勝義の諦で」なく「正量に於いても」「比量によって称量すべき」「は共相であ」り「現前[量]の所称量は自相」であるので、共に「勝義の諦」ではないとする。

【第 19 段落】第二(6/7)[たる]最後の教誨(第三法輪)の了義を決定する[やり]方に二[ある中]から| 最初[たる]瑜伽行派によっては| 「最後の教誨の直接[の]教示の了義は依他[起性と]遍計[所執性]によって空であるその智そのものであるのであるうえ| それそのものは中間の教誨(第二法輪)の教示対象(8a7/b1)の主要なものそのものであると正等覺者ご自身が仰せになったのである| |」と説示するのであるのであって| [何故ならば]「無いと言う言葉によっては| |一切の施設を否定するこ

とであるのだ | |」と説示することによってなのである | |

第 1 段落の「最後の[教誨の]了義を決定する[考え]方」を以下に取り上げ「最初」に典拠を明示しない「瑜伽行派」の主張を紹介し、第三法輪「の了義は依他[起性と]遍計[所執性]によって空である」「智」であり、同時に「その」「智」は第二法輪「の教示対象の主要なもの」「である」として、その論拠として、同じく典拠を明示しない教証を提示し「無いと言う」ことに「よって」「一切の施設を否定する」が故にであるとする。

【第 20 段落】この[考え]方に於いて法界のみが(1/2)有ることと | 有法[たる]その所取[と]能取が二として無いことを二つの後の[法]輪の後[に]得るものの言説として承認することであるのであつて | [何故ならば]如何[であれ]話として | 「法の界いがいの | | 何の故にであれ法は無いその故に | | 諸仏陀が彼が(2/3)何からであれ | | 厭離することは貪愛などであるのだとお考えになった | |」と貪愛などから厭離する[ように]為るのは貪愛などの法性であるのだと説示したことによってなのである | | これは如何[であれ]話として | 「大きな供物は大きな貪愛であり | | 一切の貪愛を(3/4)克服する様に為す | |」と[いう]ことと一致するのである | |

前段落の主張を前提として更に「法界のみが有ることと」「有法」の「所取[と]能取」の無二を第二、三法輪の後得の「言説として承認する」として、その論拠として、同じく典拠を明示しない二種の教証を提示して「貪愛などから厭離する」こと「は貪愛などの法性である」が故にであるとする。

【第 21 段落】第二[たる]実体性はないと述べる[中観派]が説示する[やり]方は | 最後の教誨の直接[の]教示にその如くに説示したそれは | 語が如何であれ[そうである]通りのものでないのである未了義そのものとして注釈するものであるのであつて | [何故ならば]『入中観[論]』*dBu ma la hjug pa*[r] (北京版 Nos. 5261~3)に | 「これは(4/5)祖師(仏陀)が未了義そのもの[であると]仰せになり且つ | | これは未了義そのものとして正理によって合理であり | | その如き種類の他の経部もマア | | 未了義そのものとしてこの経証によって明らかに為す | |」と如何な

る如くであれ病人毎に| |と[いう]等[の]『入楞伽[経]』(北京版 No. 775)の経証(5/6)と| また「[依他[起性]と]遍計[所執性]の」二によって空である依他[起性]そのものが有るならば| |この有ることは何によって分かる様に成るのか| |と[いう]等[の]自己の正理[と]に依存し了ってから最後の教誨の直接[の]教示は言葉が如何であれ[そうである]通りのことでないのだと成就したのである| |

第 19 段落の「最初[たる]瑜伽行派」を受けて、以下では「第二[たる]実体性は無いと述べる[中観派]が説示する[やり]方」を論じて、先ず第三法輪の直説は「語」の「通りのものでない」「未了義」「として注釈する」べき「ものである」とし、その論拠として『入中観[論]』を採り上げて、同論が『入楞伽[経]』という「経証と」共に「自己の正理[と]に依存し」て、上記の主張を「成就した」とする。

【第 22 段落】然らばこの[考え]方が(6/7)[所取[と]能取の]無二の智自体が自己[による]証悟を否定し了り且つ| 有法と法性[と]は| 般若[波羅]蜜多[経]śes/śer phyin から「無い[に]等しい[もの]」そして| 阿毘[達磨論]から「有る[に]等しい[ものである]」と仰せになったと説示することそれと| 修習すること sgoms/sgom pa[s]による体験の見解は瑜伽行派と(8b7/9a1)相応すると説示すると云うこと[と]は矛盾なのである| |と[いう]ならば[そうで]ないのであって| [何故ならば]月[称]の足下がその如くに説示するそれはまた| 正理の聚の説示[するやり]方を基礎として建立すべきことであるので聞[学と]思[量]によって増益を断じる為に(1/2)為し了ってから説示するが故にである|

前段落の著者の主張に対する敵者の反論を想定して「[所取[と]能取の]無二の智自体が」自証「を否定し」同時に「有法と法性[と]は」「般若[波羅]蜜多[経]」によれば「無い[に]等しい[もの]」であり「阿毘[達磨論]」によれば「有る[に]等しい[ものである]」と「説示する」この「こと」「と」「修習」「による体験の見解は瑜伽行派と相応すると説示する」「こと[と]は矛盾」と設問し、これに対して著者は「[そうで]ない」と否定し、その論拠として「月[称]」が前段落の様な主張をしたのは「正理の聚の説示[するやり]方を基礎として建立」する為に聞思「によって増益を断じ」ようとし

たのである「が故にである」とする。

【第 23 段落】その如くであるならばまた最後の教誨で円成[実性]は有ると説示したそれは| 語が如何であれ[そうである]通りのものでないのである未了義として注釈するものであると云うことは合理でなくて| [何故ならば]それから説示したその了義は| 月[称]がまた| 修習が生起した sgom byuñ [gyi]体験対象として説示(2/3)するものであるが故にである| と[いう]ならば| 矛盾でないのであって| [何故ならば]それ[と]それ(これこれ)の如くに注釈することは聞[学と]思[量]によって増益を断じる為に為したうえ| 修習が生起した経験対象として説示するそれは[修]行を实践する為に為したことであるので見解[と修]行の宗義を建立する(3/4)[考え]方は相応しないが故になのである| |

更に敵者の反論を想定して、第三法輪で「円成[実性]は有ると説示した」ことを「語が」「[そうである]通りのものでない」「未了義として注釈する」の「は合理でな」とし、その論拠として「その了義は」「月[称]が」「修習が生起した体験対象として説示」した「ものであるが故にである」とする。これに対して、著者は「矛盾でない」とし、その論拠として、これこれと「注釈する」のは聞思「によって増益を断じる為」であり「修習が生起した経験対象」「は[修]行を实践する為」のものである「ので見解[と修]行の宗義を建立する[考え]方は相応しないが故に」であるとする。

【第 24 段落】第二[たる密]呪の見解を決定する[やり]方の差別は何であるのであるかは実体性は無いと述べる[中観派]のその阿闍梨[の]方々がお造りになった[密]呪の論書に於ける有境 yul can[たる]見解と| その見解の対境[たる]法界(4/5)と勝義諦[と]の識別は| 聖[なる]無着ご兄弟など[の]瑜伽行派の阿闍梨[の]方々の典籍から如何なる如くであれ生起するそれと一致するものだけなのであるのであって| [何故ならば]心の金剛と| 心の自性による光(5/6)明そのものに対して勝義の諦であると説示し了り且つ| それが現前に通達される智が何時であれ生じたその時[に]見解が通達される様に建立するが故にである| その如くにまた聖者が『五次第』*Rim lñā*[r] (北京版 No. 2667)で| 「光明の識別は| 自己[の]心が初めから生じなかったこと(勝義)gdod nas ma skyes(6/7)

pa| |空性の自性なのである| |と言われるそれについて説示し且つ|
それそのものを勝義の諦であると説示したことと| また| 「所取とマ
ア能取は等しく mñam du| |知覚は二種類が有るのでないのであり且
つ| |何に対しても無区別性が有るもの[で]| |それは双運すると
(9a7/b1)説示された| |或る人が常と断の知覚を| |捨離し了ってから
最高に転じる rab tu hjug[ように]成り且つ| |双運[の]次第と言われる
| |それそのものが証悟されるそ[の人]は学者であるのだ| |」と[いう
こと]そして| 「生じることが無い等の語[や]| |無二[の]智を教示す
る[ように]為る[こと]等[の]| |この一切の(1/2)詮説する[ように]為
る(能詮の)それは| |そこに於いては他を/それとマア以外を der ni
gshan 詮説したのでないのだ| |」と空性を教示する総ての経[と]続の
所詮を無二の智そのものであると説示することそして| 『集[修]行灯』
sPyod pa bsdus paḥi sgron ma(北京版 Nos. 2668、2703)から| 「勝
義の諦は| 身体が無いもの| 譬えが無いもの| 著述[の](2/3)一切と離
れたもの| 個別に自己[によって]証悟するものであつて| 」と[いう]
自己[による]証悟による経験対象であると説示されたことそして| 「そ
れから暗闇と離れた一刹那に於ける光明であつて| 勝義の諦の自己の
性相は智の目によって見えるのである| |」と[いうこと]そして| 「勝
(3/4)義の名称の少分の異門に入るように為されるべきであつて| 最初
は光明と| 一切が空であることと| 仏陀の智と| 金剛の智と| 無上
の智と| 無我と| 涅槃(4/5)槃と| 有情が無いことと| 生命(暖)が無
いことと| 補特伽羅が無いことと| 詮説すべきとして無いものと|
般若の波羅蜜多と| 一切種智性と| 真如性 de bshin ñid と| 錯誤し
ない真如と| 」と[いう](5/6)法界の[性]相[の]基礎[たる]智と| それ
を自己[による]証悟の経験対象であると説示したものが本当に沢山で且
つ| その意義そのものは『経の莊嚴[論頌]』 *mDo sdeḥi rgyan*(北京版
Nos. 5521、5527、5530-3)から| 「法性は心以外のもの[で]心[以]外のも
のは| |自性でないのであり光明として詮説したのである| |」と[いう
こと]そして| 『三十の品』 *Sum cu*(6/7) *paḥi rab tu byed pa*(北京版
Nos. 5556、5565、5571)から| 「真実は唯[意]識[で]| |この如くに真如
もそれである| |」と[いうこと]そして| 『宝性[論]』 *rGyud bla ma*[r]
で| 「個別に自己によって証悟されるよ[うに]為されるべきが故にであ
る| |」と[いう]勝義[たる]法のお身体(法身)を自己[による]証悟の経

験対象であると説示し了り且つ|『入中観[論]』*dBu ma la hjug pa*(北京版 Nos. 5261-3, 5271)では|「その(9b7/10a1)如くに説示するそれ等は唯心派 *Sems tsam pa*[hi]の同意することである」と説示し了ってから否定したけれど|聞[学と]思[量]によって増益を絶つことと|「性」相[を]執着する分別を否定すること[と]の為に為したが|修習によって実行する為に為さらないことによって(1/2)矛盾ではないのだ|広釈[たる]『灯明』*hgrel chen sGron ma gsal ba*(北京版 Nos. 2656, 2657, 2658ab, 2659)からも|「根本の続(北京版 No. 81)で|「事物は無いもの[で]修習は無い|修習するべく為されるべきことは修習でないのだ|その如くに事物は無事物(無実)*dnos med pa*[で]|修習は所縁として無いのである|」と[いう]意味は|有[と](2/3)無[と]の二辺を排除し了ってから光明と双運[と]の次第を修習することであり」と説示し了り且つ|それそのものは『呼金剛[続]』*Kyaihi rdo rje*[r](北京版 No. 10)にも説示したことであるのであって|「何故ならば」修習者は無く修習は無い|天は無く[密]呪は有るのでないのだ|戲論が無い自性(3/4)に於いて|天 *lha* と[密]呪[と]はしっかり住する|」と[いう]世俗の修習者などを排除し了ってから|勝義の双運の天と[密]呪[と]を修習するべく説示したが故にである|

第1段落の「経典と[密]呪の二つの[考え]方」の後者である「第二[たる密]呪の見解を決定する[やり]方」に於いて「実体性は無いと述べる[中観派]の」「有境[たる]見解と」「その見解の対境[たる]法界と勝義諦[と]の識別は」「無着」「兄弟など[の]瑜伽行派」「と一致するものだけである」とし、その論拠として「心の金剛と」「心の自性による光明」が「勝義の諦であり」「それ」に「現前に通達」する「智が」「生じた」「時[に]見解」に「通達」す「様に建立するが故にである」とする。更に著者は『五次第』から三種類の教証を示して「勝義の諦」と「空性」と「無二の智」の内容が一致することを、また『集[修]行灯』から三種類の教証を示して、その内容が自証「による経験対象」と「法界の」事相「[たる]智」に一致することを、また『経の莊嚴[論頌]』と『三十の品』と『宝性[論]』から各一種類の教証を示して、その内容が「勝義[たる]」法身に一致することを主張し、また『入中観[論]』の中で月称は「唯心派」の主張を「否定したけれど」それは聞思「によって増益を絶」ち「[性]相[を]執着する分別を否定する」「為に」

主張したことであって「修習によって実行する為に」「主張したことで」ないので「矛盾」「はない」とし、更に『灯明』と『呼金剛[続]』から各一種類の教/経証を示して「世俗の修習者などを排除し」「勝義の双運の天と[密]呪[と]を修習するべ」きである「が故にである」とする。

【第 25 段落】若しも然らば| 聖者ご父子(竜樹と提婆)の典籍に於いて見解を(4/5)聞[学と]思[量]の正理によって決定する時[に]| 修習による体験対象はまた有るのでない[やり]方によって説示する正理聚と| 体験対象を識別する時[に]聞[学と]思[量]の正理を無関心に放置(5/6)した[やり]方[たる]讃頌聚[と]から生起するその如くであるならば| 一つの典籍にその如くの二つの[やり]方を聖者ご父子が明らかに説示したことなど有るだろうか(無い)と[いう]ならば| それは明らかに説示したことがまた有って| [何故ならば]『菩提心釈[論]』 *Byañ chub sems hgre* (北京版 Nos. 2665=5470, 2666) から| (6/7) 如何[であれ]話として| 「勝義の菩提の心を修習した力によって生じる様に為すことであるのであって| その故にその自性を説示しする様に為すべきなのである| | 菩提心の主宰者そのもの bdag ñid gños[たる]| | 具吉祥[たる]執金剛 rDo rje bsnams を恭敬し了ってから| | 菩(10a7/b1)提心の修習は| | 有威徳(有滅劫) Srid pa h̄jig/h̄jigs byed 自身が説示した| | 諸仏陀の菩提心は| | 我と蘊 phuñ などが詳細[に]証悟された| | 諸分別によって遮蔽されるな且つ| | 常に空性[たる]性相を願望なされよ| | 悲(1/2)愍によって潤う心のマア| | 努力による修習対象であるのだ| | 」と[いう]勝義[たる]菩[提]心の識別と| | 真実[たる]悲愍と[の]結合[と]に於ける修習対象について説示したうえ| | その直後にこれ[たる]話と[いい]| | 「瑜伽行派[の]人々が| | (2/3) 自己の心の為に為し了って| | [住]処が完全[に]変化(転依)し了って gnas yoñs gyur から清浄な心は| | 個別的自己[による]証悟[の]行境である[と]詮説した| | 」と[いう]修習による実践対象と| | 「出離が何であるのであれそれは無い| | 未来は得 thob pa でないのだ| | 住する[が]故に[住]処は完全[に]変化(転依)したものの gnas ni yoñs gyur(3/4) pa[で]| | 現在に於いて何処に有ろうか(無い)| | 」と[いう]住[処]が[変]化(転依)[した]こと]gnas gyur を正理によって伺察したことと| | 「それによって個別的自主性 so sor rañ bdag ñid は| | 如何様なものであると詮説するべ

く為さい| |個別[的]自己[による]証悟を詮説したことによって| |それは事物そのものであると同意する| |これはそれであるのだと詮説するべくマア| |出来る[の]で(4/5)ないのだとまた詮説したのであるのだ| |と[いう]個別的自己[による]証悟に対して| |勝義を伺察する[ように]為す正理によって伺察する様に為さったが故になのである| |

著者は敵者の反論を想定して、竜樹と提婆「の典籍に於いて見解を」聞思「の正理によって決定する時[に]」「修習による体験対象」を無視して「説示する正理聚と」その「体験対象を識別する時[に]」聞思「の正理を」無視して「説示する」「讃頌聚[と]」が「あるならば」「一つの典籍に」「二つの[やり]方を」「説示したこと」になるけれど、そんなことは無いと設問した上で、著者は「説示したことが」「有」と回答し、その論拠として『菩提心釈[論]』から四種類の教証を挙げながら「一つの典籍」の中で「菩提心の識別と」「悲愍と[の]結合[と]」に於ける修習対象と「修習による実践対象と」転依「[したこと]」を正理によって伺察したことと「個別自証」に対して「勝義を伺察する」「正理によって伺察する」ことを「説示した」「が故に」「である」とする。

【第 26 段落】自己[の考え]方(自宗)に於いて[住]処[が]変化[したこと]と自己[による]証悟[と]の設定は決してご同意なさらないことではないのであって| |【何故ならば】他であるならば(そうでなければ)『法界讃頌』 *Chos dbyanis bstod pa* と矛盾し且つ| |(5/6) それそのもの(『法界讃頌』)に於いて言説として阿頼耶[識] kun gshi をご承諾なさるうえ| |【住]処[が]変化[したこと]が同意されないならばそれ(阿頼耶[識])がご同意される機会が無いが故に[であり]そして| |正理が伺察し了ってから承認しないことと| |言説として承認すること[と]に矛盾はまた有るのでないのだ| |

自宗は転依と自証「[と]」の設定に「同意」とし、その論拠として、そうでなければ『法界讃頌』「と矛盾」する一方で、その『法界讃頌』は「言説として阿頼耶[識]」を「承諾」と共に、転依に「同意」し「ないならば」「阿頼耶[識]」に「同意」す「る機会が無」くなる「が故に[であ]」るとし、更に「正理が伺察し」て「承認しないことと」同じ対象を「言説として承認す

ること[と]に矛盾は」無いとする。

【第 27 段落】この典籍(『菩提心釈[論]』)で| 「これ等[の]—(6/7)切は唯心であると| |〔釈迦〕牟尼が教示したと誰か[が]お造りになって gañ mdzad de| |〔何故ならば〕凡夫達の畏怖は| |捨離されるべきであるが故にであるのであり真実でないのだ| |」と[いう]ことによって唯心の同意を否定するけれど| 「瑜伽行派[の]人々が| |」と[いう]以下で行相虚偽[派]rNam rdzun の見解を説示する(10b7/11a1)説示しない[の]何であるのであっても可能であって| 「何故ならば」それから説示した等引に於ける修習[のやり]方と後[に]得[るもの]として正理によって伺察する[やり]方[と]の両者は自己の[考え]方なのである| |

『菩提心釈[論]』の一種類の教証を示して「この典籍で」は「唯心の同意を否定」している「けれど」一方で「行相虚偽[派]の見解」であろうとなかろうと「等引に於ける修習[のやり]方と」后得「として正理によって伺察する[やり]方[と]」は著者の「[考え]方」と同一であるとする。

【第 28 段落】「この心は名のみ(無実)であるのであるものであって| |」と[いう]等によって行相虚偽派を否定する[ように]為す正理を教示した(1/2)のであるのだと説示することが沢山であるけれど| |心と心所 sems byuñ は諦として無いことはその行相虚偽派の宗の義に住し終わったものであるものであって〔何故ならば〕所取[と]能取[の]両者は自己の実体によって空であると決定し了り終わったが故にそして| 『経部の莊嚴[論]』から| 「それから心はまた無い(2/3)ものそのものとして通達される| |智慧 blo を具える方によって二者は無い[と]証悟されてから| |それ(二者)を具えない法の界に住する| |」と[いう]等[の]瑜伽行の全典籍は一致しているが故にそして| 『攝[大]乗[論]』 *Theg bsdus*(北京版 Nos. 5549、5551-2)に| 「全く分別が無い住処は| |心でないのであり心は(3/4)マア[それ]のみであって| |〔何故ならば〕対象に対して思[量]しない[原]因 rgyu[s]によって生起したものであるが故にである| |」と[いう]仏陀の地に於いて心[と]心所の流動 rgyu ba が妨げられたと説示したものが本当に沢山なのである| |

『菩提心釈[論]』の一種類の教証を示して、その教証を「行相虚偽派を否定する」「正理を教示した」も「のである」「と説示することが沢山であるけれど」そうではなく反対に「心と心所」が「諦として無いことは」「行相虚偽派の宗」「義」であるとし、その論拠として「所取[と]能取」「は自己の実体によって空である」「が故に」であるとし、更に二種類の教証を提示して、この点に関して「瑜伽行の全典籍は一致しているが故に」であり「仏」「地に於いて心[と]心所の流動」は「妨げられ」とする。

【第29段落】この典籍(『菩提心釈[論]』)に於いて勝義の建立する[やり]方は| 瑜伽行派の究竟のご主張と一致するもので(4/5)あるのであって| [何故ならば]これ(『菩提心釈[論]』)そのものから| 「それ故に幻の自性[たる]心は| 顕色[と]形体の区別あるいは| 所取とマア能取あるいは| 男性[と]女性[と]中性など[で]| 実体として心は住するものでないのだ| 」と[いう]ことから| 「そ[うである]通り[に]一切の諸法の| (5/6)自性は空性である」と同意する| 」と[いう]間[の]一切は瑜伽行派と一致し且つ| 「真如性と真実際 *yañ dag mthah*| 無相 *mtshan ma med* と勝義そのもの| 最高の菩提心それそのものと| 空性とも説示したものであるのだ| 」と[いう]勝(6/7)義[たる]菩提の心そのものは性質 *ldog pa[hi]*の門から真如性などの名称が施設されるものであると説示し了り且つ| 瑜伽行の典籍に於いてもその意義そのものが明らかであるが故にである|

著者は『菩提心釈[論]』「に於」ける「勝義」「は」「瑜伽行派の究竟の」「主張と一致する」とし、その論拠として、同仏典から二(三)種類の教証を提示した上で「勝義[たる]菩提」「心」「は」「真如性など」であり「瑜伽行の典籍に於いてもその意義」「が明らかであるが故にである」とする。

【第30段落】また矛盾して| [何故ならば]瑜伽行の典籍は見[解]の時[に]所取[と]能取は無二であると(11a7/b1)決定することそして| 修[習]の時[に]無二の智は体験対象であると説示するならば| 四宗義の頂点となった他の典籍にもその如くに説示することが有るのかというならば| その如くに説示することそのものは三の『喜金剛の続(タントラ)』[の注釈?] *dGyes pa rdo rje hi rgyud gsum* (北京版 Nos. 2312-3、

2317、2319~20、2322~3?)と|(1/2)『時の輪の続[の]注釈』*Dus kyi hkhor lohi rgyud hgre*(北京版 No. 2064)[と]に明らかにしておわすのであるのであって|〔何故ならば』『第二品』*brTag pa gñis pa*[r](北京版 No. 2317?)に|「それから真実性の品を説示し了る様に為すべきなのである| |実体によって無色 *gzugs med*が見える者[や]| |無声 *sgra med*が聞こえる者はまた無い| |無香を嗅ぐ者も無い| |無味を味わう(2/3)者も無い| |無心を思う[こと]から生起した者も無い| |」と[いい]そして|「確かに一切の事物によって| |清浄になったものを真如性と詮説した| |」と要略として教示し了ってから| 不浄なものは何であるのであるのか[と]問うた回答に| 如何[であれ]話として|「色などなのである| |何の(3/4)為にか[と]云うならば| 所取と能取の事物[であるが]故になのである| |所取と能取は何でありますか| ご教誨を賜った(仰せになった)こと *bkah stsal pa*[に]| |目によって色は所取と為されるべし| |声は耳によって聞かれた様に為されるべし| |」と[いって]から|「色蘊は金剛女であるのであって/金剛でないののであって *rDo rje ma yin te*| |受 *tsor ba* に対しては白[面]*dKar mo*[r]であると(4/5)詮説した| |」と[いうこと]から|「常にこれ等は全く清浄であることによって| |これそのものは瑜伽師によって成立する[ように]成る| |」と[いう]所取[と]能取[の]二が清浄になった時期にそれ等を為す仏母 *Iha mo* たちは成立すると仰せになったことそして|「私から一切の衆生は生起した| |私から住处[の]三者 *gnas gsum*(5/6) *po* はまた生起した| |私によってこの全ては遍充されたものであって| |衆生の他の自性は見えない| |」とこの説示したことそして|「瑜伽行派が空性に入る[やり]方を説示する時に| 或る何かが何かに無いことそれはそれによって空であると如実に随順して見える *rjes su mthoñ* のであって| |(6/7)ここに於いて残余と成ったものは有るのである| |と[いう]真実が如何なる如くであれ[そうである]通りに理解すべきなのである| |」とそのあること *hbyuñ ba* そして| 瑜伽行派が阿頼耶[識]と藏[識] *sñiñ po*[hi]の成就する[ように]為すもの(能立因)として経を引用した時に|「無始の時の間| |諸法は全ての住处であるのであって| |(11b7/12a1)それが有ることによるならば全ての衆生と| |涅槃はまた獲得されるように成る| |」と[いう]これ等の説示は一義に集まるが故に[であり]そして| またそれそのもの(『第二品』)から|「自己[による]証悟は大安樂そのもの

[で] | 自己[による]証悟からマア菩提が変成し | 自己[による]証悟[の]故にであるうえ修習そのものは | (1/2) 自己の証悟の変成から[変成し/生じ] | 抑圧すべきものからマア業が生じ了って | 自己の略奪 *hphrog* 且つ自己の行為 *byed*(略奪行為者は遍入天あるいは帝釈天の異名)は | 自己[による]証悟[の]王[で]自己[の]主尊である | |と[いうこと]そして | |「自己による証悟の智は | 語の[業]道を出離した行境であって | [何故ならば]これは加持[の]次第であるが故にである | 遍智[の]智(2/3)はその如くである | |と[いう]所取[と]能取が無二であるその智そのものは住する[考え]方(実質)が究竟[で]そして | 自己[による]証悟の経験対象であると説示したのである | |

前段落の著者の主張に対する敵者の反論として、著者の主張は「矛盾して」とし、その論拠として「瑜伽行の典籍」が「見[解]の時[に]所取[と]能取は無二であると決定し」「修[習]の時[に]無二の智は体験対象であると」する「ならば」「四宗義の頂点となった他の典籍にも」同様に「説示することが有る」はずであるとするのに対して、著者は「三の『喜金剛の続(タントラ)』[の注釈?]と』『時の輪の続[の]注釈』とに「説示する」とした上で『第二品』から五種類の教証を提示して「所取[と]能取[の]二が清浄になった時期に」「仏母たちは成立する」とし、また三種類の教証を提示する中で「瑜伽行派が阿頼耶[識]と蔵[識]の」能立因「として」の「諸法」に關説すると共に、三種類の教証は「一義に集まる」とし、更に二種類の教証を提示して「所取[と]能取が無二である」「智そのもの」の実質は「究竟[で]」あり自証「の経験対象である」とする。

(以下続く)

¹ 拙稿の注3に於いて、本文の「『明[句]義[論]』 *Don gsal*(北京版 No. 5260?)」に対して「『明句論』 *Tshig don gsal ba*」を指示したのは、明白な凡ミスであり、*Don gsal*は北京版 No. 5191『現觀莊嚴論[小]註』に相当するので訂正頂きたい。これについては袴谷憲昭「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」『チベットの仏教と社会』(株)春秋社、東京、1986(昭和61)年(同『唯識思想論考』大蔵出版(株)、東京、2001(平成13)年は研究余史を付して同論文を再録している)を参照頂きたい。また拙稿の<123>第4段落の解説(p. 118)で「瑜伽行派」を唯識派としたのも、以下の第12段落以下に明らかな如く、著者の立場である<122>の「瑜伽行の中觀派」であるので訂正頂きたい。